
My name is....?

小聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My name is . . . ?

【Nコード】

N7182Y

【作者名】

小聖

【あらすじ】

ハーフの少年、真明は曾祖父の葬式で掛け軸の蛇に出会う。その地の守り神として崇められる蛇は、真明に興味を持ち、また彼も日常の刺激として神と行動を共にする。変わらない日常に変化をもたらすために。変わらなく人々を見守るために。

一章一話

結局のところ、僕の今まで生きてきた時間は何だったのだろうかと思う。

それは、顔すら知らない自分の曾祖父の葬儀に参列するために長いこと車に乗り、

聞いたことも無い田舎の町までやってきて、親族であろう人達と面会した時の最初の感想だった。

欧州のもうひとつの島国で英語を覚え、父の生まれた日本に住んで日本語も話せるようになった。

だけど、それだけではこの島国では生きていけない、学校の初日で確信したことだ。

それはこの家でも同じ、血は確かに繋がっているようだけど、髪の色ひとつ違うだけで日本人は関係を持つとうとしない。

「大往生だったなほんと、爺さんもよかつたじゃないか」

「やっと逝ったもんだよ、百超えても外で働いてたんだから」

「そうそう、いつまでも泣いていられないもんだ」

「じゃあもうすぐご飯にするから、一度顔を見てきなさいよ」

「分かった、おい、こっちへ来い、ひい爺さんに線香やるぞ」

僕から見れば祖母になるのだろうか、さっきまで父と話をしていた人がちらりとこっちを向いた。

東洋人の顔に金髪はあまりにも似合わない。それに僕の髪はまるでこっちで見かけたドールのように鮮やかだ。

これを聞いて何も知らない人は羨ましかるだろう。しかしこれでは筋金入りの不良にしか見えないのだ。

そして祖母も、そんな僕に怯えていた。こっちを見て引きつった笑いを浮かべるだけだった。

今日一日、僕は英語だけで過ごすとした。

>早く何か食べて休みたいよ<

>そう言うな、ここの人は優しいぞ？すぐ仲良くなれる<

>そんなわけ無いだろ、まるで悪魔を見た羊じゃないか<

父も英語で話せば合わせてくれる、話の相手は父だけで十分だ。

隣の部屋に寝かせてある曾祖父の隣に座り、顔に掛けられている布をそつと取り払う。

その顔は、とても死んでいるようには見えなかった。

寿命で死んだらしい、いかにも幸せな人生を送ったような顔は、鏡で見た自分の顔をそのまま老けさせたように見え、

どうしても、長く見続けるなんて出来なかった。

枕元に置いてあった線香を取り、そっと火をつけ、立てる。それしか出来ないと思って、立ち上がるうとした。

ふと、正面を見ると、掛け軸にかかれた絵が目に入った。

いつもならそのまま見過ごすはずの絵が、今の僕を釘付けにした。

>父さん、あの絵は何だ？<

>あれか、あれは近くの神社に祭られている神様の絵だ。ひい爺さんが神主をやっていたんだ<

>何で神様が蛇みたいな形をしているんだ？神様は人じゃないのか？<

>蛇の神様なんだよ。同時に、ここらの川の神様でもある。けどももうすぐ祠を残して社は取り壊すそうだ<

「二人とも、挨拶は済んだのかい？早く荷物を置いてきなよ、ご飯にするよ」

「分かった、>行こう、ちょうど良い話のねたじゃないか、姉さんに聞いてみな<」

どうやら祖母じゃなくて叔母だったらしい。荷物を持って廊下を歩くと、少し空腹を感じた。

食事ついでに聞くのも悪くないと思った自分が、少し、憎く思えた。

一章二話

「この神様はね、川の守り神なの。大昔に大きな洪水があつて、

それを鎮めるためにご先祖様が神として、お祈りを始めたのが始まりよ」

食事の時間、それとなく叔母に聞いてみたら、嬉しそうに話してきた。

この家は、神を祭る一族として、そして地域の纏め役として続いてきた古い家らしい。

実際、屋敷のような家だとは思っていたけど、政治的にもそれなりの力を持っているようだ。

今、この部屋には10人強ほどの大人が食事をしているが、まだ昼だからなのか仏の前だからなのか、

ぼそぼそと話すだけで、叔母は少し浮いていた。

「それは分かったんだ。それよりも聞きたいのは、何で神様が蛇なんだ？蛇なんて災いの象徴じゃないか。」

神様と言ったら人の形じゃないのか？」

「そ、それは、どうなのかしらねえ……」

「知らないのか？」

「それがね、お爺ちゃんの代で本殿は取り壊して、財産も必要な分だけ残して寄付することにしたのよ。」

だから私もあまり詳しくは無いのよ」

「どうしてだ？ そんなことをして得になんてならないだろ」

「そうなんだけど、もうここらの川もコンクリートで固められて、氾濫なんて起きやしないからね。」

古い習慣ももう時代に合わないし、お爺ちゃんが入院している間に話し合ってたのよ。」

あの人はそういう習慣に厳しい人だったし、絶対許さなかっただろうからねえ」

なるほど、どつりで旧家の葬式なのに人が少ないわけだ。

あまり大きな音は立てず、さっさと片付けてしまいたいと思ってるらしい。

とは言っても、やはり僕の疑問には答えてくれそうにも無かったので食事に戻ることにした。

簡単な食事だったが、どれも美味しいものばかりだ。皿が空になるのもすぐだった。

このままさっきの部屋で休んでいようかとも思ったが、その本殿を一回見てみたいと思った。

>ねえ、さっきの”本殿”ってどこにあるの？ 壊される前に一回見たいんだけど<

「え！？ あの、ごめんなさい言葉が分からなくて」

「>ああごめん< ええと、本殿はどこにあるの？一回見てみたいんだけど」

「ああ本殿ね。なら・・・」

叔母が指差したのは、窓から見える山だった。

「あの山の頂上にあるわよ。良い眺めだしすぐ上れるから、一回行って御覧なさいな。」

昼食が終わってから一時間、さっきの質問に対する後悔しか残っていなかった。

何より坂が急すぎる。

山の頂上ならこの地域一帯が見渡せると言う理由から造られたらしいが、もっと合理的な選択肢は無かったのか。

すぐ上れるなんて冗談も良いところだった。

それにあの老人は、こんな坂を毎日の様に上っていたのか。

素晴らしき日本人だ。

前を見ても、頂上までまだ半分ほどしか来ていないようで、足が止まりそうになる。

こんな坂を上ってたいした眺めでもなかったら、今度こそ口を開かず残りの日をすこすと誓った。

それでも足を動かし続けると、途中途中にある小川に目が行く。とにかくこの山は水が豊富らしい。

いたる所から水が湧き出し、小さな流れを作っている。もう少ししたら休憩ついでに飲んでみるのも良いかもしれない。

さらに言うと、この山には杉が殆ど生えていないようだった。

斜面で見かける木は、どれも桜、樫といった自生植物ばかりだった。

春には桜、秋には紅葉があるのだろうと思うと、この山の良さが分かった気がした。

以外にもそこからの道のりは長くなかった。

いや、すでにかなり上っていたとは思っけど、不思議と足が軽くなつた気がしたのだ。

その建物は、山の南側、つまりこの山から流れる川と、その川が流れていく町の方角を向いていた。

確かに素晴らしい眺めだ。

眼下には広く田園が広がり、その間を埋めるように二、三の家がまとまって建っている。

そしてこの山から流れ出た水が流れを為し、その田に流れていく。そのまま流れて行き、奥少し大きな川へと続いていた。

まるで都会とは違う、この場所の時間は止まっているように見えた。社は思っていたより小さいとは思ったが、その厳かな威圧は十分に感じられた。

足元には隙間無く石が敷かれ、社の周りには草ひとつ生えていない。誰かが手入れをしているのだろうか。

賽銭箱も無く、ただ景色が良い場所のような気がした。

蛇の神に興味はあったけど、社の扉には鍵が掛かっただけで入ることは出来なかった。

良い場所ではあったけど、一時間以上も掛けて上ってくることも無かった。

どうせこの場所も、僕にとってはちょっとしたイベントでしかない。

あの坂を引き返すと思うといやな気もしたけど、まあそこまで長い道にはならないだろう。

神社に背を向けて、ほんの二、三步前に歩いただけだった。

「誰だ。そこにいるのは！」

聞き終わるより先に、足を蹴り上げていた。

一章二話（後書き）

1〜2週で1話のペースでがんばりたいです

一章三話

とっさに蹴り上げた足がその声の主に当たったことがなりよりの驚きだった。

この辺り一帯の地面には小石が敷き詰められているのに、足音ひとつ聞こえなかったからだ。

この石の中を音を立てずに歩くことは出来ない。

そしてまた、その人も僕の動きに驚いていた見たいだ。

「お前、この土地の人間ではないな。観光にしても仕事にしても、この泉の山に立ち入るなといわれなかったのか？」

僕とあまり変わらない年齢のようだ。艶のある黒髪を長く伸ばしている。

綺麗な声をしていて、女の子と言うよりは男の子と言ったほうがいいかもしれない。

> 言われなかったよ。この山、なにかあるの？<

意識してスコットランド訛りを強く使った。ネイティブでも聞き取れない発音があるくらいだ。

まず意味が分からないだろう。

> . . . 。 姑息な手を遣わないでくれ<「どうせ日本語も堪能だろ

う？」

衝撃だった。まさか聞き取られるとは。

「何でこの英語が聞き取れたんだ？」

「英語だったのか。よく分からないから公用語で話したただけだ」

精神的に来た。頭で繰り返すと、なるほど話が合っていない。

「とにかく名を名乗れ。ほんとに知らないようだから、そのまま返してやる」

「名前ねえ。僕でも分からないよ」

「どういうことだ？記憶でも飛んでいるのか？」

「そうじゃないよ。この髪を見て分からないか？僕も僕自身が分からないんだ。」

白人なのか黄色人なのか。

イングリッシュなのかジャパニーズなのか。ここに来てますます分からなくなったんだ」

「ハーフのコンプレックスか。残念だが私には大した問題じゃない。手っ取り早く日本名を教えてください」

「……。そうだね、じゃあ日本名を教えるよ。泉 真明だ。ここには叔母の紹介で来た」

彼女の顔が固まった。それなりに予想はついていたが、やっぱりそういうことか。

「私は次泉 響だ。泉家の人間とは知らなかった。失礼した」

「良いよ別に、僕にとって大した問題じゃないから」

「そうか……。では麓まで行こう。」

家の前で一緒にいるところを見られてはいけないから、そこでお互い合わなかったことにしよう」

「分かった、聞きたいこともあるんだけど下りながら聞いても良いかな？」

「分かる範囲で答えよう」

彼女、次泉 響と一緒に来た道を戻る。

かなり慣れた様子で下りていく彼女についていくのがやっとだった。

「次泉家と泉家。何か違いでもあるのか？」

麓に降りる途中、彼女に聞いた。

「この山の神の話は聞いたか？」

「多少はね、何で蛇が神様やっているのかと思ったけど、結構どうでもよくなってきたよ」

「そう言わないでくれ。この地域には蛇神信仰があるんだ。キリストの様に絶対神では無いものの、
ここの人たちの生活に深く根付いている。」

「そこが分からないんだよ。なんで蛇なんかが神になっているんだ？」

「それなりに長い話になるが、
もともと日本と、キリスト教が生まれた古代メソポタミアでは、
文化的にかなりの違いがある。

ユダヤ教に異を唱えたキリストが死を乗り越え、使途が教えたのがキリスト教の始まりだ」

「日本はどうなんだ？」

「日本の神道は、宣誓的なキリスト教と違い、土着的なところが多い。

蛇を悪魔の使いと教えているユダヤ、キリスト教と違って、ここでは神の化身や、

その使いとして崇められている。

これは神道以外にも古代ギリシア神話や、北欧神話にも見られることだ。

案外見た目が神秘的だからという理由もある」

「いい加減なものだね、そんなに適当で良いの？」

「日本には生活に欠かせないものや、希少なものを神に見立てて崇める習慣がある。

必ずしも絶対神である必要は無かったんだ。

北の方には男根信仰まであるからね」

「そ、そうなのか……」

「まじめな話をしているんだしっかり聞いてくれ。話を戻そう。」

元々この土地には泉なんて名は無かった。一族の始まりはかなり遡ることになるんだが、

泉の名が付いたのは明治に入ってからだ。次泉家もここから始まっている」

「四民平等、苗字帯刀の自由になったから？」

「そうだ。その時まではこの山に”泉の山”と言う名前のみがあって、そこから泉家が生まれた。」

その時の代表が死んだ十四代目の曾祖父、十三代目に当たる」

「待って。つまり泉家が生まれてまだ二代しかいないってこと？」

「そういうことになる。とりわけ頭首になる人間は長命だ。」

もしかしたら何か原因があるかも知れないが、そこまでは分からない。」

泉家が生まれて数年後、時代はまさに近代革命のときだ。

十三代目は日本の国運営に加わる良い機会だと思っただらしい。」

近代学、帝王学、支配者としての知識を叩き込んだ専用の機関を作り上げたんだ」

「それが次泉家？」

「その通りだ。最初、次泉家は十三代目の奴隷のような存在だったんだ。」

学校に行くこともなく、膨大な知識と技術を詰め込んで日本の社会で暗躍した。

その後、日露戦争が終わるころに十四代目が泉家を継ぐと、逆に泉家と次泉家で協力体制をとるようになった。

神を祭る役を担ったのが泉家、社会で活躍し、富と名声を築いたのが次泉家だ」

「結構面白い話じゃないか。それが何で一緒にいちゃいけないんだ？」

「そこが重要なんだ！体だけが変わって、風習は残ったんだ。日本人の悪い癖だ。

私は今でも学校に通っていない。英語の知識だって家で学んだんだ」

「……そういうことなんだ。次泉家が稼いだ金は、泉家のものとして使われたわけだ」

「そうだ！だけどその習慣も明日で終わるんだ！次泉家は解体され、元の泉の名前を取り戻す。

十三代目が死んだ今、そのことが両家で確認されたんだ！」

「分かった落ちついて。なるほど、あの人は決まりごとに厳しい人だといっていいね。

もう泉家は止めにしたいわけだ」

「明日、あの社で両家が相對して、正式に本家復帰となるんだ。それまではお互い顔を合わせないことになっている。」

気が付くともう分かれ道に付いていた。

「話が長くなつたな。もうここでお別れだ」

山を挟んだ反対側にあるらしい次泉家の家には、ここから逆の方向に行くらしい。

「明日会つたら」始めまして」だ。それからまたこの山を登ろう」

「分かった。ねえさつき蹴つたところ大丈夫だった？結構強く蹴つてしまつたけど」

「ん？少し痛むがそれだけだ。しかしよくあの速さで足が出たものだな」

「海外にも長くいたし、そういうことに慣れてるんだ。最後に聞きたいんだけど良いかな？」

「何だ？出来る範囲でな」

「じゃあ、あの時何で音ひとつ立てずに僕の後ろまで来れたんだ？あんな小石だらけのところを音も立てずになんて無茶だろ」

「あああれか。あれはだな、あの社の警備の時に使う足場だ。これは次泉家でも私しか知らない。

あの中のいくつかの石は硬く固定されているんだ。

その石だけピンポイントに使えば音は出ない仕組みだ。」

最期にひとつ取られた気分だった。そんな方法があるとは。

「さすがだね。じゃあまた明日。早く学校にも通えるようになるよ」

良いね」

「へ？あ、ああそうだな。じゃあ明日な」

そう言って彼女は背を向けて歩いていった。最期の言葉には含みがあつた。たぶんまだ秘密があるのだろう。

だけど、彼女のこれから深く関わるつもりは無かつた。この場所は僕にとって、まだ、重要なイベントとは言えなかつたからだ。

一章三話（後書き）

一章ここまで

来週12/7 - 12/10は修学旅行で沖縄です、1週挟むかもです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7182y/>

My name is....?

2011年12月4日00時53分発行